

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

中原官[ⓧ]汾河片音韻史研究

メタデータ	言語: zho 出版者: 公開日: 2017-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2292

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者氏名 秋谷 裕幸

本論文は、中国語官話方言音韻史の最重要構成部分のひとつ、中原官話汾河方言群音韻史の研究である。

音韻史とりわけ韻母の歴史に関する限り、汾河方言群はもっとも保守的な官話方言と言える。汾河方言群音韻史なしに官話方言音韻史は成り立たない。本論文は、七つの汾河方言群方言、すなわち霍州、臨汾、翼城、新絳、万榮（以上山西省）、韓城、合陽（以上陝西省）方言の言語データに基づき汾河方言群祖語を再構し、そこから現代諸方言への音韻変化の過程を跡づける。この部分が本論文の主体をなす。同時に汾河方言群祖語が北方方言音韻史においていかなる位置を占めるかについても、各種文献資料と比較することにより考察する。

第一章では、本論文の目的、意義、方法論について述べるとともに、汾河方言群の定義づけを行う。また先行研究を紹介し、汾河方言群祖語再構の言語学的意義を確認する。いわゆる「本字考」もこの章におく。

第二章では、本論文が主たる言語データとして取り上げる七方言の音韻体系を紹介する。うち、霍州、翼城、韓城三方言は私自身が調査を行いデータを収集した。この七方言以外に、汾河方言群音韻史に密接な関わりをもつと考えられる三方言、すなわち中原官話関中方言群西安方言、晋語呂梁方言群蒲県、嵐県方言の音韻体系も同時に紹介する。

本論文では比較方法（comparative method）を用いて汾河方言群祖語を再構する。中国語方言学の領域においてよく指摘されるように、この方法論は言語や方言が分裂した後の言語接触がもたらす言語変化を想定していない。この前提は汾河方言群音韻史の現実に即していない。例えば韓城、合陽方言に対する中原官話関中方言群、とりわけ西安方言の影響は疑いようがない。そこで第三章では、比較方法を用いて汾河方言群祖語を再構する際、言語接触に由来する可能性のある音韻対応をいかに扱うかを検討する。

第四章が本論文の主体である。汾河方言群祖語を再構するとともに祖語から現代汾河諸方言への音韻変化を跡づける。汾河方言群祖語には声母 36 種、韻母 72 種、声調 7 種が再構される。声母には有声閉鎖音・破擦音を再構し、韻母には *m、*n、*ŋ 韻尾の対立、声門閉鎖音 *ʔ をともなう入声韻を再構する。声調に関しては、*陰去と *陽去以外は調値の再構も試みる。なお、音価推定に際しては過度な音素分析を差し控え、音声変化の実相を復元することに意を用いる。

第五章では、本書が主たるデータとした七方言の通時的音韻特徴を汾河方言群祖語を起点として帰納する。

第六章では、汾河方言群祖語と中古音の比較を行うとともに、汾河方言群に特徴的な音韻対応を列挙する。

第七章では、第六章で指摘した汾河方言群祖語の音韻特徴を九・十世紀の河西方言、『皇極経世声音唱和図』、『中原音韻』と比較することにより、中国語北方方言音韻史上において汾河方言群祖語がいかなる位置を占めるのかを検討し、本論文を締めくくる。汾河方言群祖語は、九・十世紀の河西方言あるいは十二世紀西北方言から変化してきたのではなく、これらの古代方言とともに、より古い段階の祖語を共有している。すなわち九・十世紀河西方言あるいは十二世紀西北方言と汾河方言群祖語は“親子”の関係ではなく、“兄弟”の関係にあると考えられる。

付録1は本論文で再構した計1187語を汾河方言群祖語を中古音の枠組みにより配列した索引である。また付録2は本研究をなすにあたり私が重点的に調査した山西省霍州方言の音韻体系および同音字表である。